

絵像や木像の阿弥陀仏は、なぜ立たれたお姿なのか？

●質問 ● 浄土真宗のお寺や門信徒のお仏壇にご安置された木像や絵像のご本尊・阿弥陀如来さまは、坐像のお姿ではなく、どうしてお立ちになった姿なのでしょう。

浄土真宗で依用される形像
本尊は、真向の等足立像で、両手の親指と人差し指を捻じて掌を外に向け、右手は胸の前に挙げ、左手を垂れ下げた印を結んでいます。建武四年（一二三二）に著された『改邪鈔』に、「瞻仰（うやまい、あおぎみる）のために絵像・木像の本尊をあるいは彫刻しあるいは画図す」（九一九頁）とあることをみますと、鎌倉時代末期から南北朝初期にかけて、形像本尊がすでに依用されていたことが分ります。

蔵宗祖八十三歳筆の黄地十字名号が基本となり、そこから金泥の十字名号に光明を添えたもの、さらには名号の両側に十二光仏が描き添えられたものなどが現れます。一方、南北朝から少し時代が下がった頃の形像本尊には、前の名号本尊と同様に、尊像の光明の間に十二光仏が描かれたものがあります。これから十二光仏を除くと、現行のような形像本尊となることから、その原型は十字名号にあるといわれるのです（宮崎圓道説）。江戸時代に入って教学研究が盛んになるとともに、形像本尊の教学的根拠が問題とさ

れるようになりました。本願寺第四代能化（教学の指導者、日溪法霖師は「方便法身義」「方便法身尊形弁」を著して、真宗の本尊は、『観経』に説かれる住立空中尊であると主張されました。『観経』の第七華座観には、釈尊が阿難と韋提希に対して「わたしは今そなたたちのために、苦悩を除く教えを説き示そう」といった言葉に依じて、阿弥陀仏が突然空中に姿を現し、その左右には観世音・大勢至の二菩薩がつきそっておられたとあります（九七頁）。これを住立空中尊といっています。真宗の本尊は、その阿弥陀仏のお姿を模したものであるというのです。そして、立ったお姿をとられていることについては、後述する善導大師のご文を拠り所として、苦悩の衆生を救おうとされる大悲救済の願心を表されたものであると述べられています。

この法霖師の説に対して智暹師は、「浄土真宗本尊義」を公にして反駁します。智暹師は真宗の本尊は、『天経』に説かれる靈山現土の仏であると主張します。『天経』の釈迦指勸分には次のように説かれています（七四頁）。釈尊が阿難に「阿弥陀仏を礼拝するがよい。すべての世界の仏がたは、いつもみなとともに、阿弥陀仏が何ものにもとられずさまたげられないことをほめたたえておられるのだから」と告げます。その言葉にしたがって阿難は、阿弥陀仏を礼拝し、「世尊、どうぞ阿弥陀仏とその国土、そしてそこにおられる菩薩や声聞の方々を、まのあたりに拝ませてください」と申し上げます。この言葉が終るとすぐに阿弥陀仏は大いなる光明を放ち、一切諸仏の国々を照らされました。ここに現れた阿弥陀仏を模したものが形像本尊であると主張さ

れたのです。形像本尊が立ったお姿をとられていることについては、観仏三昧の行者は坐像を本尊とし、念仏三昧の行者は立像を本尊とするから、真宗の形像本尊は立像なのであると主張されました。

明和四年（一七六七）七月に、第五代能化義教師は、本尊論についての公式見解を発表し、住立空中尊が真宗の形像本尊の拠り所とされました。確かに真宗の形像本尊を等足立像とあらわす教学的根拠を求めらば、『観経』の住立空中尊に求めるのが妥当であると思われれます。しかしそれはあくまでも、『大経』の法義である第十八願の教主であり、苦悩の衆生を救おうとする大悲の願心をあらわしたものであることを忘れてはなりません。善導大師も住立空中尊のお姿について、

娑婆は苦しい世界であり、さまざま悪人が同居し

て、八苦に苦しめられ、ややもすれば互いに背き、心をいつわり親んで笑みを浮かべている。たえず六つの賊がつき随って、三悪の火の坑にまさに陥ろうとしている。もし阿弥陀仏がみ足をあげて、迷いを救われなかつたならば、この三界の牢獄をどうして免れることができよう。こういうわけで、立って衆生をつまみ撮って行かれるのである。（七祖四二四頁、意訳）

と、大悲救済の願心をあらわしたのが空中にお立ちになった姿であると示されています。また、形像本尊の印相については、一般的には来迎印とか、施無畏・与願印の一種と見られますが、法義に添って領解するならば、一切衆生を撰取して捨てないという阿弥陀仏の仏意をあらわした撰取不捨印と見るべきでしょう。（龍谷大学講師 普賢保之）